

坂井祐円・西平直編著『無心のケア』 晃洋書房 (2020)

濁川 孝志 立教大学コミュニティ福祉学部*

Sakai Yuen, Nishihira Tadashi, *Innocent Care*

NIGORIKAWA Takashi



『無心のケア』、本書を読んで最初に感じたことは、この書評の依頼を受けなければよかった……という感想である。正直なところ、良く理解できないのである。それは全面的に私の貧困な知識と理解力の低さに起因するものであり、本書の内容や執筆陣の論考には微塵も問題がないことを最初に断っておく。そんな私が本書の論評などできるわけがなく、従って、ここに記すのは「書評」などというレベルのものではなく感想文の域を出ない。それを大前提に内容に入りたい。

「無心」は分かる。いや、深い意味は理解していないかも知れない。しかし少なくとも、何となくその意味は分かる。「ケア」も分かる。これも同様に深く正しい理解かどうか別として、一般的な意味は分かる。しかし「無心のケア」と言われると、その意味するところが良く分からない。仮にこれが一般の会話の中で使われたなら、「下心のない純粋な思いからの愛に満ちたケア」というような意味になるのだろうが、トランスパーソナル心理学の学術用語として使われるとなると、その中身は、それほど単純なものではないだろう。「無心のケア」とは、一体何なのか。この耳障りの良い言葉の意味するところは、何なのか。その概念は、いかなる

ものなのか。坂井祐円/西平直編著『無心のケア』を読み解きながら、「無心のケア」の意味について考え、それを以って本書の書評に代えたいと思う。

序章で坂井祐円は、ケアの思想に関して次のように述べている。すなわち、

現代思想の新たな展開として浮上してきた「ケア」の思想は、共同社会が、誰かにケアされ、誰かをケアすることで成立している、という普遍的な構造原理を明らかにした。そしてまた、人間は傷つきやすさや悲しみや痛みや苦悩を抱えた存在であり、だからこそ他者への共感的受容的な関りを通してケアへの欲求を高めてゆく、とする人間観を示している。このような共同社会ならびに人間存在の本質をケアの概念に見ようとするのが「ケア」の思想であり、この意味において、今日の共同社会を維持する上での不可欠な倫理課題となっている。

この、共同社会を維持するうえで不可欠な倫理課題である「ケアの思想」を、東洋の精神文化伝統において中心的な位置を占めてきた「無」の思想に基づいて捉え直した結果、「無心のケア」というケアの根源とも言い得る視座を見出した、としている。

* nigo@rikkyo.ac.jp
立教大学コミュニティ福祉学部
〒352-8558 埼玉県新座市北野1-2-26

そして本書の目的については、以下のように述べている。

本書の目的は、さしあたり「無心のケア」の成立の可能性を検証し、その理論構築を試みることにある。また、その上で、無心のケアが医療・福祉・教育・心理・宗教などが関わる具体的なケアの現場、対人援助の場面において、どのような意味を持つのかを考察し、これを臨床教育学的に位置づけることを課題とする。

さらに、本書が考察しようとする問題と射程について、以下に示す五つの観点で整理できるとしている。

- ① 共同社会の倫理課題としての「ケアの倫理」
- ② 「無」の思想の系譜
- ③ 学校教育・心理臨床の現場における「ケアリング」の概念
- ④ 医療・福祉・宗教の現場における「スピリチュアルケア」の概念
- ⑤ 「臨床の知」の平地、「臨床教育学」の視座

では、ここで坂井が見出したとする「無心のケア」という視座の実態は如何なるものなのか。以下、各章ごとに読み解いてみたい。

なお本文中で、筆者とは本書の各章の書き手のことであり、著者とは本論の書き手、すなわち濁川を指すものとする。

第1章 「無心のケア」という問題提起

「無心のケア」が必要になるケースとは、主としてスピリチュアルケアのニーズがある場面なのだろうか。本章の筆者西平直は「無心のケア」という問題敵をする冒頭で、スピリチュアルケアという言葉に関しての所感を述べている。すなわち、以下の想いである。

このカタカナには苦勞した。「スピリチュアル」も「ケア」もどうにも日本語にならない。あれこれ探し回るのだが、いまだに妙案に巡り合わない。その代わり、私はなぜか「無心の舞」という言葉が気になった。むろん「ケア」は「舞」ではないから奇妙なのだが、「スピリチュアルケア」と「無心の舞」が近いように感じたのである。正確には、自分が「スピリチュアルケア」に期待していることは、「無心に舞を舞う」という理想と似ているように感じたのだろう。ケアする側が無心に舞う（無心に耳を傾ける）。そのことが、弱さや悲しみに寄り添う原点になるのではないか。そう感じたのである。

ここで既に、「無心」という言葉がでてくる。ということは、つまり、西平の中ではそもそもスピリチュアルケアとは「無心」とセットになった“営み”なのだろう。そしてスピリチュアルケアのニーズが生じる前提としての、「スピリチュアル・ペイン」と「スピリチュアル・クライシス」を対比し、「ペイン」として体験される以前の「クライシス」に目を向けることが「弱さや悲しみに」寄り添うことと重なるのではないかと述べている。すなわち、クライシスに目を向け、弱さや悲しみに寄り添うことにケアの本質がある、と言いたいのだ。その理由を、「無心」と関連付けながら以下のように記している。

「ペイン」は外から和らげてもらうことが可能である。医療は「ペイン」を取り除く手助けをする。ところが、「クライシス」は、外から取り除くことができない。クライシスは、その当事者が自ら通り抜けるしかない。内側から温め、内側から変わってゆくしかない。クライシスを「癒す」ことはできない。その代わりクライシスは「癒える」。内側から癒えてゆく。

その時、ケアするとはどういうことか。どのように寄り添えばよいか。外から何もすることができない時に、それでもその場に寄り添い続けるとはどういうことか。おそらく「無心」という言葉が登場するのはこの場面である。無心に耳を傾ける。クライシスに寄り添うために無心になる。あるいは無心になるしかない。

一方、ピラードが崩れる「クライシス」は、実は「プライマリー・コントロール」が働き始める貴重な機会ということになる、という。そしてその「プライマリー・コントロール」とは、暮らしの中で身に付けた不適切な心身の使い方を脱学習し、週間のバイアスに影響されない本来の身体の動きを回復すること、と定義する。すなわち、クライシスこそは、本来の自分を見出す貴重な体験となる、と言いたげなのだ。クライシスを通して本来の自分を見出す……それは、なんと苦しい道程なのだろう。

また、江戸期の漸増・沢庵和尚が示した「無心」の解釈を以下のように紹介し、「無心」とプライマリー・コントロールの関係について言及している。

「無心」とはどこにも心を留めないこと。有信はこころをどこかに留める（あるいはひとつの区切りに目を留める）。それに対して、無心はどこにも心を留めない。無心は流れている。全身に「気づき」が行き渡っている。

「無心」とは心が無いことではない。「心を留めることが無い」ということである。しかし普通の心の働きではない。沢庵の用語法では、「気づき」は、一か所に留まることがなく、柔らかく流動的な心のはたらきである。先の「プライマリー・コントロール」に近い。

そして、ケアする者は、クライシスの本質を理解し、これを大切にして、初めてそれに寄り添うことができるという。つまり、クライシスから早く離れて新たなピラードを構築するのではなく、むしろ、このクライシスに耳を傾け、一緒に聴く。クライシスを、先に述べられたように本来の自分を見出す営みのプロセスと捉えるなら、その「寄り添い」こそがケアの原点だと言いたいのだ。

苦しみの渦中にある人に寄り添う時、ともすると人は自分に苦しみを和らげる力があると勘違いして、苦しみの中身を聴こうとする。しかし西平は、深い苦しみの中に在るときの人の思いを次のように推察する。

深い苦しみの中にある時、私たちは簡単に「誰かに聞いてほしい」などとは思わない。語ったところで分かってもらえないと感じる。あるいは、語ったところでどうなるものでもないと感じている。とすれば、「聞いてほしい」という言葉は、「語りたくない」という思いとワンセットにして理解するくらいがちょうどよい

そして、「苦しみを誰かに聞いてほしい」という思いは、ケアの出発点ではなく、むしろその出発点にたどり着くたにある、というのだ。さらに、苦しみは言葉にならない。聴く耳があって初めて言葉が生まれる。聴く者がいて、初めて、話をしてみる気になる、続けるのである。では、ここでいう「聴く者」とは、どのような者なのか。その答えの中に「無心のケア」の本質が潜んでいる。

「聴く人」は、「身体が反応してしまう」という。「聴く人」は相手の痛みを目にして、そのまま通り過ぎることができない。相手のためになるとか、役に立つとか、その方

法があるとか、それらすべてに先立って「からだが生きてしまう」。こそが原点になる。そうした感受性を持った人が「聴く耳」を持った人であり、そうした人が待っている時、言葉が生まれる。

それはまさに「無心」の姿である。無心に耳を傾ける。余計なことは考えない。「からだ」が自然に反応する。

聴くという行為に、意味があるのか、あるいは有効なのか。そうした問いに答えることなく、ただ共に居続ける。あるいは、そうした問いを心の奥に秘めつつ、しかしそれらの問いに囚われることなく、ただ耳を傾ける。無心に耳を傾ける。

無心のケアは、そうした姿を私たちに提示する。あるいは、そうした姿を私たちに突き付けることによって、私たちに「寄り添う」ことへ差し向けているのかもしれない。それこそが、「無心のケア」ではないのか、という西平の問題提起である。

第2章 「一/多」モデルに基づいたスピリチュアルケア理論概要

筆者小西達也は、米国でスピリチュアルケア専門職「チャプレン」としての専門教育を受け、日/米、病院/在宅でチャプレンとしてのスピリチュアルケアを実践、その後は日本においてチャプレンやその日本版ともいえるべき「臨床宗教師」の立ち上げ、教育、更にはその資格制度の整備に関わってきている、という。つまりは、スピリチュアルケア実践のエキスパートということになる。そのような経験を踏まえ、多くの人達に需要可能なものを目指し、小西は「スピリチュアルケア第一理論」を構築した。それは、スピリチュアルケアにおける主要な課題に一定の理解を与えるものである、と筆者自身は評価している。その一方で、この第一理論はスピリ

チュアルケアの習熟者がその実践や教育のプロセスで経験する内面のダイナミクスを十分に描出できていないとし、この問題を解消するため、すなわち習熟者のケア・ダイナミクスの描出を可能にするために、自身の東洋哲学体験に基づいた「非対称性現象学」をベースとして、人間存在や世界事象のより深い次元のリアリティを統合した「一/多」モデルなる人間観・世界観を構築し、それに基づいた「スピリチュアルケア第二理論」を構築した、としている。この章では、この議論の全体像が語られている。

しかしながら、著者（濁川）がこの分野の専門家ではなく、加えて勉強不足ということも手伝い、本論を正確に理解できたとは到底思えない。従って、本章に関する解釈や論表は差し控え、書かれている項目を紹介するに留める。これはもちろん、本論の内容に問題があるのではなく、濁川の実験力の乏しさに起因する問題であることを断っておく。そして、この方が下手な論評を加えるよりも遥かに正しい内容を伝えることができると思う。

1. スピリチュアルケア第一理論：一般的人間観察に基づいたスピリチュアルケア理論

(1) 第一理論（概要）

- 1 ケア対象者の内面プロセス（「一人称・生」）
- 2 提供者のケア行為（「二人称・ケア」）
- 3 提供者の教育（「二人称・教育」）
- 4 第一理論のスピリチュアルケア定義

(2) 第一理論から見たスピリチュアルケア議論のキーワード

(3) 第一理論の限界・不十分な点

2. 「ビリーフ自由」な次元の人間観・世界観構築

(1) 「ビリーフ自由」は次元の人間観・世界観構築（一）：スピリチュアルケア現場での「内面事象」への注目

1 一般的人間観による説明可能性のある内面事象

2 一般の人間観では説明困難な内面事象

(2) 「ビリーフ自由」な次元の人間観・世界観構築 (二) : 「非対称性現象学」への注目

1 非対称性現象学

2 非対称性現象学の人間観・世界観とは

3. 「一/多」モデル (「一/多」の人間観・世界観モデル)

1 「一」(いつ) とは

2 「多」(た) とは

3 「一」→「多」: 「一」の「多」への自己展開

4 「一」→「多」: 「一」の共創的自己表現

5 「一」と全個「多」の関係性

6 「一」と各個「多」の関係性

7 その他 (複合的特性)

4. 「一/多」モデルから見た「個人 (生)」

(1) 「個人 (生) を通じた「一」の展開

(2) 「個人 (生)」の各層の展開

5. スピリチュアルケア第二理論: 「一/多」モデルに基づいたスピリチュアルケア理論

(1) 第二理論 (概要)

1 対象者の内面プロセス (「一人称・生」)

2 提供者のケア行為 (「三人称・ケア」)

3 提供者の教育

(2) 第二理論から見たスピリチュアルケア議論のキーワード

6. 生の基本的実践としての「一」覚「多」現

以上が本章の概要である。冒頭に記したように、書者自身が本論の議論を正確に理解してはいないのであるが、本論の意義とは別の問題として、本論が本書の主題である「無心のケア」の中で、どのように位置づけられ、また関連づけられるのか、という議論が希薄であったよう

に思われた。

第3章 グリーフケアを支えるビリーフ

本章の冒頭で筆者の稲垣応顕は、自身のグリーフ体験、そしてそれが癒されるプロセス実体験として綴っている。更にそのストーリーには、偶然とするにはあまりにも不自然な筆者自身の霊的な体験も含まれる。この部分は純粋な読み物として面白い。稲垣のグリーフ体験とは、妊娠中の我が子を不幸にも亡くすという出来事で、幸い母体は助かったものの稲垣夫妻にとって、取り分け妻にとっては大きな心の痛手となった。そして、その悲しみが癒されるまでには2年近い歳月を要したのだが、夫婦が落ち着きを取り戻した理由を次のように記している。

我々夫婦の悲嘆の終結は、死者へのとられからの解放を謳った従前のグリーフワークの考え方とは相入れない。今日的な悲嘆学を支持することにもなるが、“怜(ご子息の名前)”とのつながり意識である。“共に居る”感覚をもてたことで落ち着きを得たのである。

彼らの喪失体験からくる悲嘆は、喪失の対象との繋がり感で癒されたのである。そして、科学技術全盛のこの時代にあってもなお、死後の世界の存在を願い以下のように綴るのである。

科学的に証明できないからと言ってあの世といわれる世界がないとは答え切れない気がしている。むしろ、我々夫婦の悲嘆が“怜”とのつながり意識をもてたことで落ち着いたことを踏まえると、彼が思い切り遊んでいる死後の世界が有って欲しいと願うのである。

以上は、筆者の私的なグリーフケアの体験であるが、それを踏まえ、論理的観点から捉えた喪失体験とグリーフケアに関して言及している。その中でも面白かった議論は、文化人類学の考察の世界では、人類は他者に労わりの気持ち＝感情を持った時、死者を悼み思慕する悲嘆の気持ち（感情）を持った時に人間となったと結論付けている点である。筆者によれば、悲嘆とは人間にとって最も古く、同時に人間らしい感情ということになる。

筆者はグリーフケアの具体的方法として、①悲嘆の自己開、そして②認知行動カウンセリング的な手法があるとしている。そのうち自己開示の重要性に関して、鈴木康明（2011）の論文から以下の部分を引用している。

「残された人は、泣きながら、語って、語って、語り尽くして、語り尽くしたと思った悲嘆がリフレインするために、また語って……。逝った人を思い出すことが思い出になり、その思い出を語ることに思い出になるまで語って……。それでも残された人が明るくなることはない。ただ、それでも自分は生きてゆかなければならないと、ふと気づいてくれるだけである」

これは鈴木語りであるが、筆者はこれを例にして自己開示の有用性を訴えるのである。そして、「残された人が自己開示するためには、当然のことではあるが、その自己開示を受け止めて聴いてくれる人、一緒に居てくれる存在が重要である」と述べている。自分の悲嘆を語るにより、仮に悲しみが癒えることがなくても、「それでも自分は生きてゆかなければならない」と気付いたなら、ケアの重要な部分は成されたのだろう。これから先は、“時間”に委ねるしかないのではないか。素人の私には、そ

のように思えてならない。

グリーフケアを支えるビリーフに関して、筆者は次のように述べている。

グリーフケアとは、まぎれもなくスピリチュアルケアに含まれる一領域である。すなわち、このケアは死の臨床に係わり悲嘆の状況にある人への魂のケアであるという意味である。グリーフケアを支えるビリーフとは、様々な表現の仕方があるのである。しかし、その最大公約数としてのビリーフは“命の尊厳と慈しみ、残された人の命を支えようとする意志”なのであろう。

親しい他者との死別体験は、残された人に経済的な支えを含む社会的苦痛や寂しさや心細さなどの心理（精神）的苦痛と共に、言葉では言い尽くせない“スピリチュアルペイン”を引き起こすことが多い。その痛みは、残された人の宗教的思想を背景とする生きる上でのビリーフ（個人的ないし社会的存在として自身が生きるための哲学と信念と方向性）＝魂を損傷することから、残された人に実存的空虚感をも引き起こしてしまう。

しかし、それでも残された人は生きてゆかなければならない。その際、林（2003）が述べる「人が人として生きようとする心（中略）人として生きる支えを求め心」に寄り添う実践が、グリーフケアなのであろう。したがって、繰り返しを含むケアの担い手には、何よりも命に対する尊厳と畏敬の念、残された人を“裏表なく”“損得勘定なく”慈しむ気持ちと態度が求められる。それらの要求を一言で示せば、“愛”ということにもなろう。

この記述は、「無心のケア」との関連で考え

るとき、本章の核心であろう。すなわち、ここで筆者が言う“愛”こそが「無心のケア」を支える根源であると私には思えるのである。

第4章 カルマ・ヨーガと無心のケア

筆者中川吉晴は鈴木大拙の「無心」に関する記述を引用しながら、いきなり冒頭で自身の考える「無心のケア」の本質に関して、次のように述べている。すなわち、

無心のケアとは、いったん個の世界から離れて無心を体得し、そこからまた「差別(分離)の世界」にもどってくるものということになる。(中略)無心のケアは、根源的次元にある無心を軸とした往還の動きをふくんでいる。

この文章の意味するところは浅学の私にとってかなり難解であるが、以下の補足説明でおぼろげながら理解できる。

無心のケアが現実世界にあらわれるとき、それは、たとえば林信弘のいう「無の愛」という形をとる。

無の愛とは、無の意識に徹するなかで、一方では他者の中に我が生き、我のなかに他者が生きる自他合一においてあるとともに、他方では他者は他者、我は我の自他分離・自他独立においてありつつ、可能なかぎり利己心の克服に努めることによって、我も生かし他者も生かすことである。

自他合一と自他分離という矛盾するあり方が「無の意識」を媒介することによって同時に成り立っているのが無の愛である。すなわち、無心のケアにおいても自他合一

と自他分離が同時に起こるといえるのである。

それはいかにして、同時におこることが可能になるのだろうか。それを中川は、東洋の叡智である「カルマ・ヨーガ」になぞらえながら説明している。

カルマ・ヨーガとは、中川の言葉を借りれば以下のようなものである。

カルマ・ヨーガとは、行為をしながらも、特定の結果を期待せず、何が起ころうと成功や失敗といった判断をせず、それらを平等に見て執着することなく、行為をただ行為のためにだけなすのである。

この中川の言葉を補足するように、我々が成し得る行為の本質について Ramesh S. Balsekar の以下の言葉を引用している。

誰もがふだんから経験していることだが、人が実際に「できる」のは決意することであり、それ以上のことについては、実際のところ何も私たちのコントロール下にはない。決意は、私たちの運命や神の意志に左右されて、行為に結びつくこともあるし、そうならないこともある。行為は実際に起こったとしても、望まれた結果を生み出すこともあるし、そうならないこともあり、それもまた私たちの運命や神の意志にかかっている。これが私たちの日常の経験である。いったん私たちが決断すれば、そのあと何が起ころうが、決して何ひとつ私たちの手の内にはない。

そして、以下のように結ぶのである。

したがって、大切なのは、未来に生じる結果については自分がコントロールし得な

いことだと理解して、それを手放し、どんな期待を抱くこともなく、いまここで生じている行為に集中することである。

カルマ・ヨーガでは、行為の結果を追い求めるのではなく、結果の意識を手放し、行為そのものに専心する。行為はグナゆえに引き起こされる自然な働きであり、行為者としての私が行為をなしているのではない。

これは、神道でいうところの「中今」に近い概念であろうか。しかし中川自身も指摘するように、行為者としての意識を無くし結果を求めない、などという姿勢を貫くことは非常に困難であり簡単にできることではない。では、どうすればよいのか。その疑問に関しては、次のように答えている。

重要なのは、そのような反応を無理になくそうとすることではなく、むしろそれをふくめて、その一連のプロセスから離脱することである。無私になることを目指すのではなく、行為の中に入り込んでいる自我に気づき、それを見てとることが重要である。

結果を手放すとは、それを関係性の世界の中で見るということである。結果を動機とせず、どんな結果も等しいものみなし、それに執着しないうえで、もっとも重要なのは、行為への「気づき」を高めることであると言えよう。カルマ・ヨーガの実践は、気づきを持続的に高めるなかで可能になるものである。

したがって、カルマ・ヨーガにおいて重要なのは、行為を明晰に観察し、行為にありのままに気づくということである。

このように「気づき」の重要性を強調する。そして、これをケア場面における援助者にも当てはめ、「援助活動においても、援助者は「援助者」というアイデンティティを観察し、気づきのなかにとどまることが重要である」と述べている。そして、「無心のケア」は、援助者という行為から離れ、「誰でもない」という無心の状態のかなで存在し、分離意識が消え去った時に生まれる状態であるとし、次のように結んでいる。

援助の道とは、自己の分離意識から抜け出し、根源的な一体性へと目覚めてゆくプロセスである。「無心のケア」は、そのような一体性から立ちあらわれてくるのである。

カルマ・ヨーガは、どうやら「無心のケア」を生み出す一つの道なのであろう。

第5章 教育におけるマインドフルネスと無心

筆者セベリア・アントンは「無心のケア」を考察するうえで「教育現場」を対象とした。それは、筆者が西平直による「西村流無心の哲学」に多大なる影響を受け、それを教育現場に活かしたいと考えたからである。そして、教育の中でも無心の哲学と結びつく可能性をもつ「マインドフル教育」を取り上げている。マインドフル教育とは、「教育にマインドフルネスの実践を応用する教育運動」である。そして、マインドフルネスの意味に関しては、必ずしも標準化されてはいないが、ジョン・カバットジンの定義を引用し「マインドフルネスとは物事があるがままに受け容れ、現在の瞬間に、価値判断をせずに注意を向けることによって現れる意識＝気づき」としている。

カバットジンが提唱するマインドフルネス教

育では、以下の学習目標が掲げられている。

1. 主にフォーカスのための（心を集中させる）瞑想と心の安定を支える練習を通じて、フォーカスと注意（力）を育むこと
2. コースの内容について観照し、内観することによって、学生は教材（題材となっているもの）を自分の心の中に発見し、その教材に対する理解を深めること
3. 慈悲、他者とのつながり、教育における道徳的でスピリチュアルな側面の深い理解
4. 自分の心の本性、人格的な意味、創造性と洞察を探究すること

本章の目的は、教育の応用という観点に話しを絞り、西平のいう「無心」と社会における観照的マインドセンターの「マインドフル教育」を詳細に比較し、その相互貢献を計るところにあった。そしてその比較に際して、先のセンターが掲げる4つの目標を切り口にし、「私と世界」「私とカリキュラム」「私と他者」「私と私」という4つの関係をテーマとして設定し議論を進めている。そして、それぞれの関係において「無心」という概念が色濃く影響を及ぼしており、かつマインドフルネスが教育という臨床の場において重要な役割を果たしていることが語られる。

無心とマインドフルネスを上述の4つの切り口で比較した結果、筆者はこの2つに様々な類似性を見出している。そして、以下のように結論付けている。

この類似性を眺めてみると、マインドフル教育で無心をどのように実践できるか、様々な示唆に富んでいることがわかる。教員もマインドフルな実践を積み、そこで学生にもこの実践を共有し、その実践を通じて異なる教材と他者の出会いが可能になると、無心の力を持つとても深い教育関係、

一種の無心のケアが実現できるであろう。

マインドフルネスの意味が、「物事があるがままに受け容れ、現在の瞬間に、価値判断をせずに注意を向けることによって現れる意識」だとすれば、これは確かに「無心」に近い概念であろうし、教育は一種の臨床場面に他ならないだろうから、マインドフル教育が「無心のケア」と関連するという議論は妥当なものであろう。

第6章 無心のケアが開かれるとき

冒頭、坂井祐円は「無心のケア」のイメージを次のように語っている。

相手のことが心配で、気になって仕方がない。そこで、なんとかしてあげたいと、いろいろと手を尽くそうとする。とにかくひたすら相手のことばかり考えている。一つ一つの行動や言動が、すべて相手のために思って表出してくる。

ここでは自分よりも相手が優先されている。相手が第一、自分は二の次。自分の心は、相手のことで一杯になっている。相手に自分の心を預けてしまっている。ということは、逆に言えば、自分の心が無くなっている状態とも言える。

このような「専心没頭」状態でケアに当たることを「無心のケア」と、ひとまず表現できると坂井は言う。そして同時に、この「専心没頭」でのケアが生み出す問題点を以下のように指摘し、これらのケースでは「無心のケア」から逸脱しているという。

一つは「共感疲労」の問題である。つまり、相手にのめりこんで、思いを寄せすぎ、疲れ切ってしまうというケースである。そしてもう一つは、相手のためと思いながら、それが一方的な

思いであり、むしろ相手に対する執着になるケースである。

そもそも禅仏教で用いられる「無心」とは無我の境地、我執を取り去った悟りの境地であり、一般人が体現できるようなものではない。しかし坂井は、日常のケアの場面においても「無心のケア」が成立する場面があるのではないかと考え、本章において、看護大学の学生実習で経験したケアの事例を挙げながら、それが成立する要件を考察している。

一つの事例として、ケアを通じて相手と心を通じ合い強い協同感覚が生み出された場合、相手との共感性が生まれ同時に一体感高まりが、それは一つの「無心」の現われであるとしている。しかし一方で、先に記した共感疲労や執着と思われる事例なども示しながら、「無心」とは何なのか、「無心のケア」とは何なのかを模索する。例えば、ケアと無心の関係を次のような捉える。

ケアという営みは、情緒的な交流のもとに成り立っている。それゆえ、無心になるといっても、感情を押し殺し、余計なことを考えずに、ただ与えられた作業を淡々とこなすことではないはずである。むしろ無心になることで、より一層共感性が高まるのであり、相手との協同感覚も深まると考えることができる。

一方、鈴木大拙を紐解き「無心」を考察した結果、無心の境地の核心にあるのは絶対的な「受動性」であるとして、次のように述べている。

このように見てゆくと、大拙のいう無心とは、心がモノ化して、無感情、無感覚になることではなく、こちらが能動的、恣意的、操作的に、計らいをもって世界を捉えようとする態度を手放したときに、初めて立ち

現れてくる、絶対の受動性としての自然そのままを体現した心のあり様を指していると言ったことができそうである。

この「無心と受動性」の関係を前提に論を進め、「誰もケアしていないが、にもかかわらず、そこにケアが成立している」ケースを事例として挙げ、それをもって「無心のケア」の出現と坂井は考える。

最後にサンスクリット語の「ウパスターナ」すなわち、「傍らに立つ」という言葉を引き、「無心」の理解を深めている。すなわち、以下の記述である。

ウパスターナとは、共に居ることによって、どの時が到来するのを待つことである。その人の傍らにいて、寄り添うことによって、じっくりと待つ。やがて、その時が訪れると、沈黙の深みをもって、苦悩する者に呼びかけ、ゆっくりと気づきを促し、癒していく。それは、大いなる慈愛に包まれる瞬間であり、つまりは「無のはたらき」である。

本来の意味で、「無心のケア」が開かれるは、まさに存在の向こう側から「無のはたらき」が立ち現れてきたときなのである。しかも、このときケアしているのは、ほかならぬ「無のはたらき」なのだ。それは、純粹に、自然に、あるがままに、清々しいまでに、無心である。だからこそ、そこに居合わせた者たちもまた、思いがけず無心となり、心の変容体験が起こるのである。

本書の中で、「無心」と「ケア」の双方を直接結び付けながら考察しているのは、本章だけであった。従って、本章がもっとも分かりやすく、かつ端的に「無心のケア」を語っていた。そこで感じたのは、結局「無心のケア」は意図

してできるものではない、という感想である。当然といえば当然で、意図とは既に無心の反意語である。従って、「無心のケア」とは、自分で目指す境地ではなく、無我夢中でケアに専心する時、条件が整った時出現する一つの現象なのであろう。だから、我々は最初から「無心のケア」を求めることはできない。これを書きながら、思い出した言葉がある。立教大学名誉教授の福山清三教授が常々言っておられた、次の言葉だった。

福祉というのは、問題を抱えている人の傍らに寄り添い、一緒になって途方に暮れることである

「ケア」も大きな括りで捉えれば、福祉の一環であろう。ここにも、「無心のケア」の神髄があった。

【本書「無心のケア」で論じられているもの】

以上、各章ごとに書かれた内容と著者の感想を書いてみた。ところで、本書の特徴を最も端的に表しているのは坂井の以下の記述であろう。

本書の構成は、一見すると、「無心のケア」というキーワードから連想された個々の執筆者の関心を、論文という形式を以って個人的に表現しているだけであり、各章間の考察の繋がりが見えにくい、という印象を与えるかもしれない。(中略)ともすると「無心のケア」の問題射程の裾野をいたずらに拡散してしまっているとも考えられなくもない。しかしながら、視点を展開させてみれば、むしろこのことは「無心のケア」というあり方が極めて流動的であり、絶えず

変化と生成をしつづける性格のものであることを、如実に示しているとも言えるだろう。無心のケアにはカタチがない。だからこそ、どのようなケアの場面においても、自在に開かれているのではないかと思うのである。

「無心のケア」には、カタチがない。流動的で常に変化しどのような場面にも開かれている。従って様々な観点からアプローチ出来る課題であり、それが結果的に本書を特徴づけることになっている。

そして繰り返しになるが、序章で坂井は本書の目的に関して次のように述べている。

本書の目的は、さしあたり「無心のケア」の成立の可能性を検証し、その理論構築を試みることにある。また、その上で、無心のケアが医療・福祉・教育・心理・宗教などが関わる具体的なケアの現場、対人援助の場面において、どのような意味を持つのかを考察し、これを臨床教育学的に位置づけることを課題とする。

この目的に対して、本書は十分に応えていた。「無心のケアの成立」のプロセスや条件を検証しつつ、その理論的背景が説明され、かつ、ケアが必要な様々な場面で「無心のケア」の持つ意味が考察されていた。

一方「あとがき」で、西平は本書に関して以下のように書いている。

「無心のケア」は確立された技法でもなければ、整理された理論でもない。それどころか、共有の理想像が共有されているわけでもない。強いて言えば、この本は「無心」という言葉に違和感を持ち続けたきた者たちの失敗と後悔の記録である。

少々自虐的に、「無心」という言葉に違和感を持ち続けたきた者たちの失敗と後悔の記録という表現をしているが、それは実態とは異なる。敢えて表現するならば、「無心」という言葉に違和感を持ち続けたきた者たちの格闘の記録]である。

さて結局、本書『無心のケア』は、何を論じていたのだろう。個人的な感想になるが、本書で論じられていたのは、詰まるところ「無心」

の意味の模索と、その「無心」をそれぞれの研究領域におけるケアの概念と結びつける営みであったように思われる。そして、「共同社会ならびに人間存在の本質をケアの概念に見ようとするのが「ケア」の思想であり、この意味において、今日の共同社会を維持する上での不可欠な倫理課題となっている」というケアの本質を考える時、この営みはとても大切なことであったことを確信する。